

鈴木信太郎全集

第五卷



編集委員

平井啓之

松室三郎

渡邊一民

鈴木道彦

鈴木信太郎全集

第五卷

大修館書店刊



鈴木信太郎全集 第五卷 隨筆

發行 昭和四十八年一月二十日

定價 六千圓

著者 鈴木信太郎

發行者 鈴木敏夫

印刷者 白井倉之助

製本者 牧 經雄

發行所 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三ノ二四
株式會社

凡 例

一、本全集第五卷には、著者が生前發表した隨筆風の文章を可なり網羅的に収録した。これは言ひかへれば、第一、第二巻にまとめられた譯詩、第三、第四巻にまとめられた研究論文以外の、著者の文業の殆ど全てを本巻にまとめることを期した、と言ふことである。

一、本巻は次の三部から構成されてゐる。

第一部『文學附近』其他。ここには著者の次の四冊の文集に收められてゐた隨筆が新しい構成のもとにまとめられてゐる。

『文學附近』白水社、昭和十一年。

『半獸神の午後其他』要書房、昭和二十二年。

『文學外道』東京出版、昭和二十四年。

『文學遁走』改造社、昭和二十四年。

以上の四冊には同一の文章が重複して収録されてゐる場合が可なりあつて、そのために本巻に収録するに際して再構成の工夫を必要としたのである。尙、右の四冊の文集には、純粹に著者の専門に關する學的研究論文とみなしてよい文章がいくつか含まれてをり、それらは本全集第三、第四巻に収録されてゐる。亦、研究的でありながら隨筆風な二篇の文章を特に本巻第三部「隨筆拾遺」に収録した四冊の文集を解體して、新しい構成を試みられたことの根據とその方針については、巻末の編者註を見て戴きたい。

第二部 ここには次の三冊の文集が收められてゐる。

『小話風のフランス文學』河出書房、昭和三十年。

『記憶の蜃氣樓』文藝春秋新社、昭和三十六年。

『虛の焦點』中央大學出版部、昭和四十五年。

右のうち『記憶の蜃氣樓』及び『虛の焦點』は、隨筆集として著者が刊行した原本の構成をそのまま再現してゐる。『小話風のフランス文學』の場合は、原本の前半部分の同名の一連の文章をそのままの配列に従つてこの巻に収録し、後半部分は、その一部を第三、

第四巻に、残りの文章群の中書評及びそれに準ずる計六篇を「補遺」の巻に廻した以外の全てを本巻第三部「隨筆拾遺」に収録した。後半部分を解體したことの理由及びそれぞれの文章の本全集への収録の狀況については編者註を見て戴きたい。

第三部「隨筆拾遺」。ここには上記で觸れた第一部を構成する文集からの二篇及び『小話風のフランス文學』よりの文章群に加へて、著者が新聞や雜誌その他に寄稿しながら、上記の七冊の文集のいづれにも收めなかつた文章を、(一)「思出」(二)「身邊雜記」(三)「味覺隨想」(四)「研究餘滴」(五)「師と友」(六)「點鬼簿」の六つのグループに分けて、排列した。それぞれのグループの中での排列の順は必ずしも年代順によらず、内容を顧慮しながら編者の判斷でまとめたものである。その方針その他についてはやはり編者註を參照されたい。尙、著者が生前、何らかの刊行物に發表したものと推定されながら、つひにその發表場所を明らかに出来なかつた自筆原稿が発見され、それらの中から明らかに完成された文章と思はれる一篇を、特に編者註の末尾に加へた。

一、同一の文章が、著者のまとめた七冊の文集の中で、重複して収録されてゐる場合には、原則として、刊行年月の一層新しい文集のテキストを決定稿とみなすこととした。テキストの異同に意味があると考へられる場合には、編者註でその點を指摘した。

一、この巻に於ける假名遣ひ、正字法など、表記はすべて右の基準による決定稿に従つた。但、第二部の『虛の焦點』および第三部の「隨筆拾遺」の諸篇の中で、新假名遣ひ、制限漢字の制約に従つて發表されてゐるものは、舊假名遣ひ、正字法に改めて収録した。これを敢へてしたことの理由については、『虛の焦點』の編者註を見て戴きたい。この點の表記法の變更に當つては、それらの文章の、全てについてではないが、その中の可なりな數について、著者の草稿を參照し得たことを附記して置く。

尙、編者註のある章句は、これを*で示した。また、雜誌には「」、單行本には『』の記號を用ひた。

鈴木信太郎全集
第五卷 隨筆
目次

第一部 『文學附近』 其他

彷徨	三
去來	元
遁走	七
轉入	一五
蹲坐	一四三

第二部

『小話風のフランス文學』

一五

『記憶の蜃氣樓』

『虛の焦點』

『小話風のフランス文學』	一五
『記憶の蜃氣樓』	二〇三
記憶の蜃氣樓	二〇四
君子有酒	二八
遊びの人生	二四
黄金傳説	二六

人工的時間 三三

『虚の焦點』 三五

游戲 三五

幻影 三九

虚像 四四

第三部 隨筆拾遺 五九

一 思出 五一

二 身邊雜記 五三

三 味覺隨想 五四

四 研究餘滴 五五

五 師と友 五八

六 點鬼簿 六五

編者註 六四

鈴木信太郎著作年譜 六三

編者あとがき 七元

平井啓之 六三

鈴木道彦編 六三

平井啓之 七元

第一部 『文學附近』 其他*

目次

彷徨

本、本、本	三
愛書雜談	八
藏書隨筆	二七
書房往來	二
書齋の話	元
本の雜談	三
將棋	三

去來

リヤン君去來	元
忘却	五
蜜蜂と魚と蛙	五
本の話	五
一、贅澤本	五
二、現在のフランスの本	五

三、獻辭の話

四、本の疎開

旅(一)	三
旅(二)	四
歌舞伎	五
俳優	七
古風な思出	六
同名異人の話	七

遁走

飽食放語	六
聖アントワヌの火	七
豹を獵る	九
アポリネエルと	九
『モナ・リザの失踪』	九
文學カフェ	二〇

轉入

畫廊歴訪	二五
洋畫印象	二五
一九三二年	二八
一九三三年	三〇
一九三四年	三三
一九三五年	三五
一九三八年	三七
覺えてゐるか	三七
達四郎個展	三六
高島達四郎	三六
蹲坐	三六
追憶	四三
手紙	四三
科學の靈	四七

彷徨

本、本、本*

好きで好きでたまらぬ作品は、翻譯書でない限り、その初版で讀みたい。作者の息が一番身近かに感じられるからである。マラルメの長詩『半獸神の午後』の如きがそれである。初版の手に入らぬ本は、なるべくゆとりのある綺麗な印刷の、良質の紙の刊行がよい。ボオドレエルの詩集『惡の華』の場合がそれである。さて翻譯となると、後の刊行ほど完全になつて行くのが普通だから、少しも初版を望まないが、それでも贅澤な本ほど讀み心地のよいのは、きまり切つてゐる。例へば山内義雄君の名譯『狹き門』なら、野田書房の版をいつも手に執る。

嘗て谷崎潤一郎氏が『春琴抄』を大阪で刊行した時のことと記憶するが、東京の本屋に陳んだ本の奥附には、初めから再版といふ文字が印刷されてゐた。黒い一閑張の表紙に金色で表題が書かれ、本文は罫の入つた紙に五號活字の變體

假名も混つた一寸古風な味の、氣持のよい印刷の本だが、どうも再版とあつては子々孫々に傳へるのに氣がひける。そこで版元の創元社に頼んで、再版といふ字の入つてゐない本を大阪から取寄せてもらつた。家中で讀んだので今は本の背も毀れてしまつたが、再刊三刊の新版で讀まうといふ氣は毛頭起らない。それほど初版の形態と作品の内容とが渾然と一體を爲してゐるのである。

その谷崎氏の傑作『細雪』が、戦争の眞最中に中央公論に載つた時、勿論ブレオリジナルとして雑誌は切取つて置いたが、初版の刊行を待ちに待つてゐた。ところが噂が傳つて、非文化的な官憲の強壓によつて公刊が許されず、私家藏本として上巻が少数印刷されると知つたので、落膽してゐた時に、はからずも谷崎さんから惠投されて、戦時下にこんな純粹の喜びを感じたことはなかつた。少し黄色味を帯びた上質の厚手の紙にゆつたりと印刷された菊版の美本を再讀三讀し、家内子供にも讀ませ、親友にも貸し、これでこの世代も文化的遺産を残したと安心して、御禮の手紙を出した返事に、私家藏版でも中巻下巻は出さうにもないと書かれてゐたのを見て、再び黯然とした氣持になつたことが、今さらのやうに思ひ出される。

近頃その上巻が再刊されたので、購つて子供らには再讀を勧めてゐるが、自分で讀む時は初版を選ぶ。それが再刊よりも美本であるといふ外に、あの戦争のさなかに、あくまで自己の美を忠實に追究した作者の氣持が、本の形體そのものに憑つてゐるやうな感がするからである。

初版だからといつて、勿論、美本であるとは限らない。その好適例に、二十世紀初頭の僧院出版本がある。
僧院といふのは、詩人で小説家デュアメルや、詩人で劇作家ヴィドラックや、詩人のルネ・アルコスなどが中心と

なつて、數人の藝術家が集つた共同共產生活の本據の名前である。ヴィルドラックの五年間見つづけてゐた夢が、一九〇六年に、マルヌ河畔のクレティユに古い大きな廢屋あばら屋を見出したので、實現されたのであつた。家の表札にはラブレエのテレームの僧院の銘「欲するところを行へ。」といふ句が掲げられたが、決して放縱我儘に振舞つたのではない。生活の自立を得るために、會員は二重の勤勞を己に強ひた。第一は藝術家として各自の理想に奉仕する生活である。第二は職工として生活の糧を得る勤勞である。後者のために會員の詩人アンリ・マルタン・バルゾンが印刷機を手に入れて、僧院の一室を印刷及び石版刷の工場とし、會員の印刷技術は職工リュシアン・リナルが指導して、毎日會員各自が職工として働いた。かくして刊行されたのが、僧院出版本である。

一番始めに印刷されたのは、デュアメルの詩集『傳説、戰爭』と、アルコスアルコスの詩集『空間の悲劇』である。勿論作者の呼吸が直接に感じられる得難い本であるが、一方に、素人の仕事であるから、技術の下手なこと、誤植の多いことも、また稀に見るフランス本らしくない本である。四六版一六〇頁の粗惡な紙に、むらのある刷り方で、鼠色の榮はえない表紙に書かれた年號さへ MCMVI (一九〇六年) といふ活字を、インクで MCMVII と訂正してある。『空間の悲劇』は三百二十部限定と書かれてゐるが、『傳説、戰爭』には刊行部數が記されてゐない。

幸にして私の所藏本は、デュアメルの方はメナアル・ドリアン夫人に贈つた本で、インクで誤植が訂正してあるし、アルコスの方は、有名な『乞食の歌』の詩人ジャン・リシュバンに獻呈した本で、獻辭に

「その歌ひたる海のごと廣大なる抒情詩人

ジャン・リシュバンに

わが一葉の扁舟は
碇いかりを揚げぬ

ルネ・アルコス

セエヌ縣・クレティユ・僧院」

と謙遜な句が豪放に書かれ、本文の誤植は鉛筆で訂正されてゐる。
 かういふ本を眺めると、作者の獻辭の入つた本が、正確に讀む上からも、一層欲しくなる。

獻辭のある、最も楽しい私藏本は、マラルメ譯のボオ『大鴉』である。

マラルメは一八六二年、二十歳の時に、詩人として雑誌に初登場してから、爾來その瑰麗ではあるが難解な詩風によつて、大衆の注目からは逸脱したが、心ある詩人の尊敬と期待とを背負つて、その詩の單行本となるのが長く翹望されてゐた。然しながら、慎重といふより寧ろ高邁な精神の詩人は、片々たる冊子に、自己の祕愛の分身たる詩を盛ることを肯じなかつた。かくてやうやく一卷の處女刊行が發表されたのは、早くも十三年を閑した一八七五年であつて、それがボオの傑作『大鴉』の散文詩風の名譯であつた。

マラルメがボオに傾倒したのは、サンスの中學校に學んでゐた頃からであり、後年ヴェルレエヌに宛てた自敘傳風の手紙に書いてゐる言葉に、「唯單にボオをしつかり讀まうと思つて、英語を修めた」といふ位であるから、この翻譯は永年の苦心の結晶であつた。そしてまた、刊行された本そのものが、當時は勿論、其後今日に至るまで、殆ど比類のない豪華な書籍だつたのである。

この本は空襲の盛な頃、自分で携へて疎開させ、まだ手元に戻つて來ないから、正確な寸法は解らないが、二折型で、横一尺三四寸、縦二尺以上の、地圖のやうに厩大な、十頁ほどの薄い冊子である。覆ひの厚紙の背は牡丹色、表裏は薄鼠色で文字なく、横側が紐で結ばれる。その厚紙に挟まれた中には、羊皮紙の表紙に裏まれて、綴ぢられてゐない恐らく和蘭陀特漉の紙に、偶數頁には原詩、奇數頁には譯詩が、見開きに美しく印刷されてゐる。羊皮紙の表紙にも文字はなく、大鴉の胸から上が水墨で描かれ、中には別紙に四枚の插繪と、一枚のエクス・リブリスが挟まれてゐる。エクス・リブリスは本の半分位の大きさの、ぱりぱりの羊皮まがひの紙に、翼を左右に廣く展げた大鴉の圖。この繪も插繪もすべ

てマネエの墨繪である。奥附の頁にはマラルメの自署と竝んで、マネエも署名してゐる。譯詩は美しい言葉で朗々と誦せられる完璧な翻譯である。

私の所蔵本は、このエクス・リブリスの繪の上部に、マラルメ自身黒いインクで獻呈の宛名を書き、下部に名前を書いてゐる。

「ヴィクトル・マルグリットに。その友、ステファヌ・マラルメより。」

マルグリットは詩人に可愛がられた年少の小説家で、その母がマラルメとは血縁の從兄妹^{いとこ}同士にあたつてゐる。

この刊行以後に、これにやや比肩する本は、『マラルメ詩集』初版四十部限定、フェリシアン・ロップス挿繪ぐらゐであらうか。ポオル・ヴァレリイも、随分美麗な本を多く出してゐるが、到底この本には及ばないと思はれる。

*
**

かういふ種類の本は、その世代の文化を後世に傳へる本である。従つて内容が無價値、低俗であるならば、何等の價値もなくなつて、懸軸が表裝だけの値打になるより更に以下に、本は紙の斤量だけの値打よりも印刷で汚してあるだけ低いといふことになるだらう。而し内容が世代を代表し、民族の最高を表示するものならば、やはりその時代の文化そのものとして、保存の可能な美本が製作されることが望ましい。如何ほど代表的な傑作であらうとも、藁紙に不純なインクで印刷されたのでは、五百年も経てば、紙はくづれて塵埃となつて、高貴な思想も書籍の肉體とともに、空中に飛散してしまふだらう。

愛書雜談

巴里の第九區といへば、まあ商業地域である。その第九區のシャトオダン街と多分テエブウ街との角であつたと思ふが、古道具屋があつた。飾窓の硝子に額を押しつけて内を覗くと、實に奇怪な光景である。大きな椅子がある、鏡がある、櫃がある、壁繡がある、玻璃の鉢がある、銀の燭臺がある、あらゆる非實用的の、こまこました器物と、どれもこれも時代が蒼然と色づけた大道具とが、亂雜に竝べられたやうに見えながら、實は整頓されて、息苦しいばかりに人間の居ない空間をうづめてゐる。

さういふ道具類の中で、割合に窓の近くに、圓卓^{まるテーブル}子が一つ、花模様の卓布が掛けられて飾られてゐた。卓上には十六折版ぐらゐの小型の革表紙の本が、無雜作に置かれてゐた。

表紙の革の古びた調子、背巾一面の金の唐草模様のさび具合、本の横の赤く塗られた色の手^て摩^された^{さま}狀、どう見ても十七世紀の装幀らしく思はれる。私は、異郷に孤獨を樂んでゐるかの如きこの書物に、不思議な愛著と憐憫とを感じた。

數日の後、再び偶然に同じ飾窓の前を通つて、硝子越しに同じ圓卓子と卓布と、卓上の十七世紀風の革表紙を眺めて、再び奇怪な愛著憐憫の情を新たにしたが、今度は更にほつとしたやうな安心に似た心持をも味つた。本が賣れてゐなかつたからである。思はず懷中の重さを胸算用してみたが、そのまま踵を廻らした。

それからなほ數日を経て、飾窓の硝子の外で、目的の本の存在を確認してから、この古道具骨董屋の店の鬨を排して入つた。つかつかと、まるで知つてゐる家のやうに、いきなり本の側に行つて、卓上から本を取り上げて、はつと不安

に似た驚きを感じた。あんまり本が軽すぎたからである。

本を開くと、印刷されてゐる文字の部分が全部、周囲の白い紙だけ残して、四角に剝^はり抜かれてゐる。全ての頁は一枚一枚糊著けにされて、裏の表紙に貼り付けられて、表の表紙だけが開かれる。だから、形こそは本であるが、木のやうにこちこちな箱になつてしまつてゐる。十六折版の大さだから丁度、卓上に置く巻煙草入れに適當だ。本の背文字を見ると『ニノン・ド・ランクロ書簡集』と題されてゐた。

私は憤然として店から飛び出した。うらぶれた淋しい氣持になつた。日は麗らかに照り渡り、自動車は風を切つて疾驅して、肩のあたりをすいすいと燕のやうに通り過ぎて行く。味氣ない世の中だ。虎が死んで皮を残すといふよりも寧ろ、河豚^{ふぐ}が提灯となるやうに、本が文字を棄てて煙草のケースになつたのだ。

私はあてなく彷徨^{さまよ}つてゐるうちに、これも運命だと觀念するやうになつた。油繪が額縁だけの値となり、日本畫が表装の値段で賣買される場合も多い。本だつて同じだ。装幀で價値の定まる時もあれば、内容で……いやまてよ、事情が少し違ふやうだ……

フランスの文學書についての話だが、本の價値は勿論内容できまるけれど、現實の値段と内容とは殆ど關係がない、といふ事實を明確に認識したのは、數年の後だつた。

それならば本の値段は何によつてきまるか。文學書は、初版であり、印行部數が少く、本が美しい場合に、價格が數的に上昇する。但、その本の著者が愚劣で、作品がくだらぬ時には、如何に稀少であり美麗であらうと、やはり装幀の材料と紙だけの値打となつてしまふ。印刷してなければ、もつと値打があるんだがなあ、などと詠嘆される本さへ生ずるのである。

これに反して價値のある初版が、更らに獨自の歴史を持つ時には、一層珍重される。獨自の歴史といふのは、例へば、

著者が自筆で有名な他の作家に宛てた獻辭を書いてゐるとか、著名な藏書家の藏書票が貼られてゐるとか、出版と同時にの素晴らしい装幀が施されてゐるとか、其他、本を個性化するあらゆる貴重な事實を指すのである。かういふ獻辭などが普遍的に愛翫されるやうになつたのは、第一次歐洲大戰以後である。

以上のやうに抽象的に述べたのでは、甚だ漠然として捉へ難いから、一例を擧げてみよう。

十九世紀後半の象徴派の詩人ステファヌ・マラルメは、その詩品の純粹さ、その詩格の高遠なこと、またその人間の溫顔慈眼、全フランス文學を通じて一流の詩人である。世紀末及び二十世紀劈頭を飾る文人は、ヴァレリイも、ジイドも、クロオデルも、ルイスも、レニエも、皆嘗てはマラルメの門を叩いて彼を師と仰いだ。畫家ゴッガンも、ルノアールも、ホイッスラアも、音樂家ドビュッシーも、マラルメの客間ヤコンに出入して、その人物に傾倒した。この古代の聖賢のやうな詩人マラルメの作品の中で、最も傑れた詩は『半獸神の午後』である。今この作品について、書籍として考察してみよう。

『半獸神の午後』は、詩人の生存中、單行本として三度刊行された。初版は一八七六年巴里のドレンヌ書房發行、百九十五部限定版で、エドアル・マネエが挿繪とカットを描いてゐる。表紙は日本の奉書ほうしょに純金押箔刷、挿繪一葉は美濃紙に二色刷、本の型は縦一尺三分横七寸二分、十四頁で綴ぢてなくて、黒と薔薇色の絹の紐が葉のやうに挟まれてゐる。この詩集の美しさ、寂さびのある、深さのある美しさは、比類がない。高雅な稀有な清楚な完璧の書物である。それだからこそ、マラルメの畏友である孤高の小説家ユイスマンズの傑作『アルプスさかしま』の中の主人公で、耽美主義の權化と崇められるデ・ゼッサントが、『半獸神の午後』の一節、

その時 われは 感激の第一義天に目醒めざめなむ、

光の太古の浪の下に、蟲むしろに立ちて、ただひとり、